

平成28年度 第2回人権教育ミドルリーダー育成講座

第2回講座では、性的マイノリティにかかる人権課題についての理解を深めるとともに、人権尊重の視点に立つ学校づくりにおけるリーダーとして求められる資質を向上するための研修を実施しました。

1 日時及び会場	平成28年8月4日(木) 9:30~16:00 田原本青垣生涯学習センター
2 参加者	第4期受講者 7名 第5期受講者 7名
3 内容	テーマ『性的マイノリティの人権』 9:40~11:00 講演「自分らしく生きる」 11:05~12:00 全体討議・まとめ テーマ『人権尊重の視点に立つ学校づくりに向けて』 13:00~13:20 アクティビティ 13:20~15:55 グループ討議・まとめ

【講演】「自分らしく生きる」

田崎 智咲斗(NPO法人きららの木 統括管理責任者)

- ・ 電通ダイバーシティ・ラボの調査結果によると、13人に1人がセクシュアル・マイノリティと示されている。子どもたちや同僚の中にも当たり前存在する。日本でもセクシュアル・マイノリティの人権擁護に向けての動きは出てきているが、まだまだ当事者にとって生きにくい状況に至る所にある。
- ・ カミングアウトは当事者にとって命がけの行為である。カミングアウトは本人が決めることで、周りが強要するものではない。カミングアウトすることのできる環境を整えることが大切である。
- ・ 本人の意思に関係なく他人に打ち明けることを「アウティング」という。「アウティング」は、その人の命を奪うことにもつながる。自分のことを誰に、いつ、どんなふうに説明するかはその人が決めることであり、「アウティング」は絶対にしてはいけないことである。
- ・ 「オカマ」「ホモ」「レズ」等の差別用語は絶対に使わないでほしい。子どもたちに言うてはならない言葉であることをしっかりと教える必要がある。
- ・ 性教育を「命の授業」として学んだ。学校で、できるだけ早い段階から取り組むことが求められる。また、教室や保健室にセクシュアル・マイノリティに関する本や資料を置いておくことで、当事者も含む様々な子どもたちが手にとることができる。誰もが身近に感じることで、セクシュアル・マイノリティが当たり前存在することを知ることができる。
- ・ 自分自身は、女性用と男性用のトイレしか無いことで困ることがたくさんあった。「身体障害者用トイレ」と言わずに「みんなのトイレ」と呼ぶことで助かる人が大勢いる。学校でも、すぐにできる配慮であると思う。



【グループ討議】「人権尊重の視点に立つ学校づくりに向けて」

- ・ 各グループに分かれ、自校の「人権尊重の視点に立つ学校づくり」における課題を出し合い、その課題に対して、自分はリーダーとして何ができるか、やっていきたいかについて意見交換を行った。「自身の姿勢を絶えず問い直すこと」「教職員の自尊感情や自己有用感を育むこと」「教職員間をつなぐこと」「何事にもあきらめず粘り強く取り組むこと」等、今後、リーダーとして求められる役割について確認し合うことができた。

<参加者の感想から>

- ◇ 生徒は自ら「言わない」のではなく、「言えない」のであって、それは周囲が「きっといいだろう」「いたとしても、ものすごく少ない」「一人だけ」という無責任な発想や発言が生徒にそうさせているであろうと痛感し、改めて我を振り返る機会になりました。
- ◇ 「ありのまま」を見つけることは、世の中にある人権課題を克服するために大事な視点だと思う。その大事なことを考えることができるのは、人との出会いによって、人の生き方に学ぶしかないのかもしれない。そう考えると、私自身にできることとして、人と人をつなぐことを大事にしていきたいなと改めて感じさせられた。